

50 の質問で読み解く 18 世紀イギリス小説 (2)

藤 田 佳 也*

Reading 18 century English novels with 50 questions (2)

Yoshiya FUJITA*
(Accepted 12 July 2018)

17. 『ガリヴァー旅行記』と『ロビンソン・クルーソー』はどこが違う？

次に、ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』に話を進める。まずはテキストの抜粋部分を読んでみる。『イギリス小説入門』では、小人の国リリパットにおいて、ガリヴァーが宮廷の火事を自らの尿を放出させて鎮火する場面が選ばれている。ここでは原文にあたりながら、デフォーの書き方との違いに気づかせたい。

I was alarmed at midnight with the cries of many hundred people at my door; by which being suddenly awaked, I was in some kind of terror. I heard the word *burglum* repeated incessantly; several of the Emperor's court making their way through the crowd, entreated me to come immediately to the Palace, where Her Imperial Majesty's Apartment was on fire, by the carelessness of a maid of honour, who fell asleep while she was reading a romance. I got up in an instant; and orders being given to clear the way before me; and it being likewise a moonshine night, I made a shift to get to the Palace without trampling on any of the people. I found they had already applied ladders to the walls of the apartment, and were well provided with buckets, but the water was at some distance. These buckets were about the size of a large thimble, and the poor people supplied me with them as fast as they could; but the flame was so violent, that they did little good. I might easily have stifled it with my coat, which

I unfortunately left behind me for haste, and came away only in my leathern jerkin. The case seemed wholly desperate and deplorable; and this magnificent Palace would have infallibly been burnt down to the ground, if, by a presence of mind, unusual to me, I had not suddenly thought of an expedient. I had the evening before drank plentifully of a most delicious wine, called *glimigrim* ... which is very diuretick. By the luckiest chance in the world, I had not discharged myself of any part of it. The heat I had contracted by coming very near the flames, and by my labouring to quench them, made the wine begin to operate by urine; which I voided in such a quantity, and applied so well to the proper places, that in three minutes the fire was wholly extinguished; and the rest of that noble pile, which had cost so many ages in erecting, preserved from destruction.

(川口 26-27)

『ロビンソン・クルーソー』の場合と同じく、語順を意識しながら読んでいく。冒頭の“I was alarmed at midnight with the cries of many hundred people at my door”については、情報提示の遅延によるサスペンスの効果という点で、『ロビンソン・クルーソー』との類似が認められる。「はっと目を覚ました」という描写から始まるが、“alarm”は通常、突然の恐怖や心配によって不安にさせるという意味であり、読者もまた、一体、何が起こったのだろうかと不安にさせられる。そしてそれは、先へと読者が読み進めていくことをうながすことになる。平井正穂訳では、「真夜中のことであったが、わたしは突然

* 農食環境学群循環農学類英語圏文化研究室
English-Speaking Culture, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences

わが家の入り口で何百人という連中が口々に何ごとかを叫んでいる物音に目を覚ました」となっているが、このような原文の効果については、ほとんどなくなってしまっている。

原文では、その不安の原因が「何百人もの人々の叫び声」であったことが“with”以下で示されている。ここまでは現実の世界でもあり得る状況であり、リアリズムに基づく描写であるといっていよう。

一方で、“at my door”という最後のフレーズは、何百人もの人々が玄関のドアのところに集まっているという、小人国以外では不可能な光景をくっきりと描き出す表現であり、日常を非日常へと転換する。そして、今ガリヴァーがいる場所が小人国であることを読者に再確認させる。

ここでは、この場面を映像化するとしたらどのように映像化するか、ということを読者に問いかけてみたい。その作業を通して、この書き方の意義について考察するのが目的である。

ガリヴァーが不意に目を覚ます。不安そうな表情のアップ。少しカメラが引くと、真夜中で部屋の中は真っ暗である。すると、たくさんの人々の叫び声が聞こえてくる。窓から外を覗くガリヴァー。たくさんの人々が叫んでいる様子が映される。そこでカメラがグッと引くと、それらの人々が大きなドアの前にいることがわかる。私たちはここが小人国であることを再認識する。このような感じになるだろうか。

リアリズムで非日常的世界を描写するというのが、『ガリヴァー旅行記』の重要な特徴であることをこの事例から理解させたい。続けて、今度は読者にテキストの抜粋箇所から同様の事例を探させてみる。

“I made a shift to get to the Palace without trampling on any of the people”において、“the Palace”までは現実世界の描写と読めるが、“without”以下でこの世界の非現実性、つまりここが小人国であることが焦点化されている。また、“These buckets were about the size of a large thimble”においては、“large”の後に小さな“thimble”が置かれることで、世界が一気に変換されていることに気づく学生もいることだろう。

デフォーのリアリズムの書き方を踏襲しながら、表現の最後において現実を非現実へと変換する。それこそがスウィフトの書き方の一つの特徴であり、それがセンテンスという単位においても明確に現れている。スウィフトは、デフォーの書き方の特徴を

的確に理解しているからこそ、デフォーのパロディーともいえる、このような新しい書き方を生み出すことに成功しているといえるだろう。

本当の意味で新しいものを生み出すためには、先行するものを正確に理解することが必要となるということを読者と確認したい。

18. prolepsis とは？

次に“the poor people supplied me with them as fast as they could”における prolepsis (予弁法) という用法について考えてみる。prolepsis とは、動詞がもたらす結果を先取りして形容詞として用いるという用法である。

具体例として、“The poor lady lost her son”という文をとりあげる。この文を「その可哀相な女性は息子を失った」と訳すと誤解を与える可能性がある。この訳だと、元々その女性は可哀相な境遇にあったが、それに加えて息子を失うことになった、という意味にも聞こえる。しかし原文の“poor”は、息子を失ったことについて可哀相だと先取りして表現している。つまり日本語にするなら、「可哀相なことに、その女性は息子を失った」と“poor”を「文飾の副詞」的に訳すと、原文の意味に近づけることができる。

“the poor people supplied me with them as fast as they could”の場合も、小人国の人々が、できるだけ早くバケツを自分に渡そうとしている様子を可哀相だと思っているのであり、訳すならば「可哀相なことに、人々はできるだけ早く私にバケツを渡そうとしてくれた」ぐらいになるだろう。

ここでは、この prolepsis が読者の反応を先取りすることで、読者を物語のなかに引き込む効果があることを理解したい。「可哀相な人々」というフレーズを読んだ読者は、一体、なにが可哀相なのかと先を読み進めることとなる。

先にも述べたように、読書行為を前へと進める書き方については、スウィフトとデフォーは類似しており、スウィフトはデフォーの書き方をかなり踏襲しているといえる。また『ロビンソン・クルーソー』においては、出来事が起こっている現在に読者を引き寄せる表現として、過去形と組み合わせる“now”を用いるというものがあつたが、『ガリヴァー旅行記』の抜粋部分においては、“this magnificent palace”の“this”が、読者を出来事が起こっている現在に引き寄せる役割を果たしている。同様の表現は“These buckets”にも用いられている。ここにも、両作品の類似性が認められる。

そして、こういった共通点があるからこそ、デフォーとの描き方の違いが際立つこととなる。共通するところがあるからこそ、違いが見えてくるということについて、学生たちとさまざまな具体例をみつけてみたいところである。

19. 仮定法とは？

次に、“I might easily have stifled it with my coat”と“this magnificent Palace would have infallibly been burnt down to the ground”における仮定法について、英文法を復習をしながら考えてみたい。

この2つの文においては、仮定法過去完了形が繰り返されているが、これもまた、読者が先を読み進めるようにうながす表現方法であるといえる。仮定法過去完了とは、過去の事実と反する仮定をする際の形であり、その裏には、ある過去の事実が存在している。これらの表現において、実際に起こった出来事はそれぞれ、続く“which I unfortunately left behind me for haste, and came away only in my leathern jerkin”と“if, by a presence of mind, unusual to me, I had not suddenly thought of an expedient”において示されている。

訳では「上着を上からかぶせたらなんなく消すこともできただろうが、生憎私は慌てていたので、革のチョッキだけを身につけていた」「この壮麗な宮殿が消失するのはもう明らかに時間の問題であった。ところが、珍しく、この期に際しても私は冷静さを失っていなかった。ある名案が突如として頭に閃いた」と、ここでは原文の語順が加味されたものとなっている。原文における、読者を意識した語り手の巧みな語り口を理解したい。

デフォーの描くクルーソーとスウィフトの描くガリヴァーに共通する一つの特徴は、科学的、論理的、合理的な思考・行動のパターンである。以下の箇所にはガリヴァーのそういった特徴がはっきりと見てとれる。

The heat I had contracted by coming very near the flames, and by my labouring to quench them, made the wine begin to operate by urine; which I voided in such a quantity, and applied so well to the proper places, that in three minutes the fire was wholly extinguished

まずは、体温が上がった理由として、炎にとっても近づいたこと、そしてその炎を消そうと躍りになったことの2つをあげる。そして、その体温の上昇が体

内にあったワインに利尿作用をうながしたおかげで排尿へとつながったと説明する。そして3分で火事が完全に消えた根拠として、尿が非常に大量なものであったこと、また的確な場所に放出できたことの2つを理由としてあげる。理由を複数あげる記述の仕方については、抜粋部分の“and orders being given to clear the way before me; and it being likewise a moonshine night, I made a shift to get to the Palace without trampling on any of the people”という箇所にも現れているが、明確な数字を示す点、出来事のつながりを論理的に説明する点、そして事象の発生について複数の根拠の列挙する点などに、科学性、論理性、合理性がうかがえる。

20. ジョナサン・スウィフトってどんな人？

ひとまず抜粋部分の解説をここで終え、次にジョナサン・スウィフトについて大まかな説明を行う。

スウィフトは、アイルランドのダブリンで生まれた。弁護士であった父親は彼が生まれる前に死亡している。ここでアイルランドおよび、いわゆる「イギリス」という国について説明する。

United Kingdom「連合王国」は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、そして北アイルランドの4つで構成されている。昔の英語の教科書には、よく“I am an English man”という例文が載っており、「私はイギリス人です」という訳で教わったが、正確な意味は「私はイングランドの人間だ(スコットランドやウェールズではなく)」であって、スコットランドやウェールズに対する優越感を感じさせるものだけといえるだろう。

アイルランド島の北東部にある北アイルランドについては、アイルランド共和国との位置関係の歪さに気づく学生も多いだろう。1066年におけるノルマン人の侵攻以来、アイルランドはイングランドに支配され続けていたが、1922年、イングランドから独立する。しかし、イングランドは実効支配を続けるため、現在の北アイルランドは渡さなかった。それが、この不自然な国境の理由である。

イギリスの国旗はイギリスの歴史そのものでもある。連合王国の国旗であるユニオンジャックは、イングランド、スコットランド、北アイルランドそれぞれの国旗を組み合わせたものであるが、そこにウェールズの国旗は含まれていない。2007年、当時のホッジ文化担当閣外相が、国旗の変更を検討すると語り、ユニオンジャックが約200年ぶりに変更されるかもしれないと話題になったことがあるが、国旗にデザインが採用されていないウェールズの不満

がその発言の背景にあった。

ユニオンジャックのデザインは1606年、イングランド（白地に赤十字）とスコットランド（青地に白の斜め十字）の組み合わせで原型が作られ、1801年にアイルランド（白地に赤の斜め十字）が加わった。ただ、ウェールズは早くからイングランドに併合されていたため、ウェールズの旗にある赤い竜のデザインは組み入れられなかった。

こうしたことから、ウェールズの国会議員らは「4つの連合国を表現するデザインに変えるべきだ」と訴えてきた。ホッジ文化担当相がそれに応えたわけだが、結局、国旗の変更は実現しなかった。

私たち日本人が漠然と考えているほど、いわゆる「イギリス」という国は一枚岩ではないことを学生たちに理解させたい。スポーツなどではそれぞれが分かれて出場することも多いし、スコットランドではイングランドとは別の通貨が流通し、独自の法律も作られている。また、イングランドとは話される英語もかなり違っており、英語のなかではかなり訛りが強い方である。

以前、イーオンのCMにスコットランドの俳優ユアン・マクレガーが起用されていたが、これは彼が俳優としてスコットランド訛りに苦しめられたことに由来する。『スター・ウォーズ』では、オビ=ワン・ケノービを演じたが、この役柄においてもスコットランド訛りが聞きとれる箇所があり、スコットランド訛りの強さがうかがえる。ちなみに、同時期にユアン・マクレガーとイーオンのCMに出ていたのは、歌手のセリーヌ・ディオンで、彼女はカナダのケベック州の出身。ケベック州はフランス語圏で、セリーヌ・ディオンは英語を外国語として学んだことから、CMに起用された。

CMひとつとっても、文化的背景を知ることにより深い理解をすることができることを伝えたい。

ここで話をスウィフトに戻す。スウィフトが『ガリヴァー旅行記』を発表したのは、デフォーが小説を発表したのと同じく、60歳近くになってからであり、デフォーとスウィフトはジャーナリズムの分野で20年にも渡るライバル同士であった。大きな評判を勝ち得た『ロビンソン・クルーソー』にスウィフトが強く触発されたことは間違いない。そんな2人であるが、相違点も多い。

デフォーは大学教育を受けておらず、新興商人階級の代表であり、非国教徒であったが、スウィフトは当時のアイルランドが与え得る最高の教育であるダブリンのトリニティ・カレッジに学び、地主階級を支持し、国教徒であった。スウィフトは、長くメ

ニエール病にかかっていたが、晩年になって精神異常をきたすこととなる。

トリニティ・カレッジの「トリニティ」とは、父なる神と子なるイエスと聖霊が1つのものであることを示す「三位一体」という意味であるが、これは聖パトリックの逸話が元となっている。

聖パトリックはアイルランドの守護聖人で、5世紀前半頃、アイルランドにキリストの教えを伝えたとされている。それ以前のアイルランドでは、ドルイドと呼ばれる僧が、予言者、裁判官、妖術者として権力を握っていた。聖パトリックは少年時代にウェールズからさらわれて、アイルランドで羊飼いとして働かされていたが、やがてアイルランドから逃げ出して聖職者となり、布教のために再びアイルランドにやって来た、と伝えられている。

アイルランドに到着した聖パトリックは、キリスト教の教えを説く際に、三つ葉のクローバー「シャムロック」を使って、「三位一体」を説明した。シャムロックは現在、アイルランドの国花となっている。そして3月17日は、St. Patrick's Dayとして、今でもアイルランドでは特別な日である。その後、キリスト教はアイルランドの土着信仰と融合しながら広がり、現在ではアイルランド共和国内の9割近くのアイルランド人がカトリックを信仰している。

19世紀には、大きな飢饉がアイルランドで発生し、多くの国民がアメリカへと移民したため、現在、全アメリカ人の12パーセントほどを占めている。ハリウッド系の映画で、アイルランドを話題にするものが多い理由の一端がここにある。

それほど馴染みのないアイルランドという国について、理解を深めるきっかけとしたい。

21. 風刺とは？

ここで、スウィフトの書き方の特徴とされる風刺(satire)について考えてみる。『広辞苑』によると、風刺とは「遠まわしに社会・人物の欠陥や罪悪などを批判すること」とあるが、文学においては1つのジャンルとして確立している。その特徴は、人間の愚かさを笑う喜劇的精神と、人間の欠点を矯正しようとする道徳的目的にあるといえるだろう。スウィフト以前においては、詩で描かれることが多く、17世紀後半のJohn Drydenと18世紀前半のAlexander Popeの時代に最盛期を迎えた。ポーブと同じ時代に生きたスウィフトが散文を使って風刺を書いたのは、時代の要請によるものといえる。

ここで風刺というものを具体的に理解するために、アイルランドの貧困問題についてスウィフトが

書いたパンフレットをとりあげる。

パンフレットというのは、主に18、19世紀のイギリスにおいて、自らの政治的あるいは宗教的な考えを表すのに使われた小さな冊子であり、Sir Thomas Moore, John Milton, P. B. Shelleyといった著名な文学者たちも多くのパンフレットを発表している。そしてスウィフトも、ライバルであるデフォーもまた、多くのパンフレットを発表した。

スウィフトが発表したパンフレットのなかでも最も有名なのは、1720年に発表した『穏やかな提案』と題されたものだろう。正確な題は *A Modest Proposal for Preventing the Children of Poor People from Being a Burthen to their Parents or Country, and for Making them Beneficial to the Public* 『貧しい人々の子供たちが両親や国の負担とならないように、そしてその子供たちが公共に利するものになるようにするための穏やかな提案』となっている。アイルランドはカトリックの国で避妊を認めないこともあり、子供の多さが貧困の1つの原因となっていたが、このパンフレットにおいてスウィフトは、アイルランドの貧民救済方策として満1歳の赤ん坊を食用にするのが良いとし、その調理法まで列挙している。

子供は1歳までは母乳だけで育つ。他に費用としてはせいぜい年2シリングかかる程度である。アイルランドの人口は150万人で、子供をちゃんと育てることができるカップルは3万組以下である。残りの17万組が子供を産むブリーダーとなる。各組が1人産むとして、流産などで死亡する5万人を引くと、12万人の幼児が残ることになる。

アメリカ人から聞いた話によると、1歳の栄養のいい子の肉はすばらしく美味だそうで、シチューにしてもフリカッセやラグーにしてもいいらしい。そこで、12万人の子供のうち、2万人だけを将来のブリーダーとして残して、10万人は1歳になったところで貴族や資産家に売る。その肉は高価だが、それは地主にふさわしい。彼らはすでに親たちを貪り食っているからである。

この国には貧しいカトリック教徒の子が全体の4分の3いる。だからカトリック教徒減らしにもなる。出費もないし、手間もほとんどかからない。すべて自分たちでやれることで、だから、イングランドに迷惑はかけない。

最後の部分は、イングランドに対する痛烈な皮肉である。そもそもこのような残酷な提案をせざるを得なくなった状況を作り出した一つの要因は、イングランド政府の植民地政策であったからである。

人肉を食するのはひどい提案だが、そもそもイングランド政府はアイルランド人を人間として扱っておらず、獣同然の扱いをしている、とスウィフトは考えていた。このパンフレットをスウィフトの精神的な病の兆候とする研究者もいるが、重要なことは、怒りがそのままではなく逆説的に表現されているという点であり、これこそが風刺の最も重要な特徴であることを理解したい。

22. パロディってなに？

先にも述べたように、『ガリヴァー旅行記』は『ロビンソン・クルーソー』のパロディであるといえるが、その他にも『ロビンソン・クルーソー』、あるいはそこで描かれるある種のユートピアのパロディといえるものが多くある。

Johann David Wyss の *Der Schweizerische Robinson* 『スイスのロビンソン』(1812)などは1981年フジテレビ「世界名作劇場」において『家族ロビンソン漂流記 南の島のフローネ』としてアニメ化されたりもしているが、William Golding の *Lord of the Flies* 『蠅の王』は、数あるパロディのなかでもその典型であろう。

近未来の大戦中、イギリスから疎開する少年たちを乗せた飛行機が、南太平洋の孤島に不時着する。当初は協力し合っていた少年たちであるが、意見の対立から次第に凄惨な殺し合いへと向かう。クルーソーが孤島をユートピアへと変えたのに対して、子供たちは心の奥底に潜んでいた邪悪な衝動にとられ、窮地に陥っていく。

ノーベル文学賞も受賞している J. M. Coetzee は2つのパロディを書いている。1983年のブッカー賞受賞作である *Life & Times of Michael K* 『マイケル・K』(1983)は、孤島から内戦下の南アフリカへとその舞台を移し、主人公マイケルが病気の母親を手押し車に乗せながら、さまざまな困難のなか、ケープタウンから内陸の農場へと向かう姿を描く。*Foe* 『敵あるいはフォー』(1986)は、『ロビンソン・クルーソー』の書き換えといえる。ここで扱われているのは、人種、階級、性差の問題である。たとえば、この小説においてフライデーは舌を切り取られたという設定になっているが、この点には、「50の質問で読み解く18世紀イギリス小説(1)」で述べた「強制された自発性の元で声を抑圧された非西欧人」というものが、非常に明確に具体化されているといえるだろう。(藤田 49-50)

21世紀に入ってからの作品としては、Yann Martel の *Life of Pie* 『パイの物語』(2001)があげら

れる。インドで動物園を経営する父に連れられインドのマドラスからカナダのモントリオールへと移住する途中、パイの乗った貨物船は嵐に巻き込まれ沈没する。たった1艘しかない救命ボートに乗り助かったのは、シマウマ、オランウータン、ハイエナ、そしてベンガルトラのリチャード・パーカーとパイであった。そして船上において、4匹の動物たちと1人の人間のサバイバル生活が始まることになる。この作品については、後で「信頼できない語り手」との関連で再度、言及することを予告しておく。

パロディとは、なんらかの点において先行する作品に異論をつきつけるものであるが、これが、18世紀イギリス小説の展開をうながす一つの大きな要因となった。このことは、基本的に芸術全般についても該当することだろう。『ロビンソン・クルーソー』と『ガリヴァー旅行記』の関係を見ても、パロディという観点から見ていくことでさまざまなことに気づくことが可能になるが、これから扱う作品についても同様のことがいえる。

学生たちに、文学作品や芸術作品に限らず、いずれの領域・分野においても、先行するものを知ることの重要性を再度、理解させたい。

23. ガリヴァーの4つの旅とは？

『ガリヴァー旅行記』は、船医ガリヴァーが4度の航海で旅した国々の見聞録という形で書かれている。

最初の航海でガリヴァーが漂着するのは、Lilliputという名の小人の国である。住民はヨーロッパ人の十二分の一のみでしかない。この国では、二大政党間で激しい政争が繰り返されている。これは、『ガリヴァー旅行記』出版当時、保守党の源流であるトーリー党と自由民主党の源流であるホイッグ党との間にあった争いのパロディである。

リリパットにおける2つのグループは、互いに陰謀を企て、いつも対立しているが、それに加えて、この帝国は36ヶ月間も隣国ブレフスキュと戦争状態にある。その戦争の原因は卵。もともと、リリパットでもブレフスキュでも、人々は卵を大きい方の端から割って食べていたが、現皇帝の祖父がまだ小さかった頃、大きい方の端から卵を割ろうとして、指を切ってしまった。そのため、当時の皇帝は卵は小さい方の端から割るようにとの命令を発することになったが、人々はこの命令に憤慨し、事件が頻発し、皇帝が退位を迫られることもあった。小さい方から割ることにあくまでも反対して死を選んだ者は、一万一千人に達し、多くの者がブレフスキュに

逃れた。大きい方の端から卵を割る者が記した書物は禁書となり、その考えを持つ者は職にもつけないかった。

当時のイギリスの読者であれば、ブレフスキュはフランスを、新しい卵の割り方は英国国教会を表していることにすぐに気づいたであろう。

第2の航海で漂着するのは、Brobdingnagという巨人の国である。住民は、ヨーロッパ人の十二倍の大きさがある。Lilliputでは巨人であったガリヴァーが、この国においては小人となることになる。このBrobdingnagについては、後で詳述するロシア・フォルマリズムのdefamiliarization「異化」の有名な例としてとりあげられることが多い。

第3の航海では、Laputa「ラピュタ」、Balnibarbi「バルニバービ」、Luggnagg「ラグナグ」、Glubbudrib「グラブダブドリッブ」と幾つかの国に立ち寄った後、日本を訪れ、長崎からオランダ船に乗って英国へと戻る。

ラピュタは、宮崎駿『天空の城ラピュタ』の名前がとられたことでも知られているが、空を飛ぶ島で、バルニバービの首都。科学者である全住人が科学について、常に沈思黙考、いつも上の空でいるため、正気に戻るために頭や目を叩く「叩き役」を連れている。たとえば彼らの中には、キュウリから日光を取り出す研究をしている者などがいる。学問のための学問、科学のための科学が風刺の対象となることがわかるだろう。

ラピュタの下にあり、その国王の支配下にある島がバルニバービで、ラピュタは磁石のプラスとマイナスを使ってバルニバービの上空を上下し、さまざまな圧力をかける。これは、当時のイングランドとアイルランドの関係の風刺である。

まだイングランド支配が続いていた19世紀後半、ダブリンのトリニティ・カレッジの英文科では、『ガリヴァー旅行記』の第1部と第2部しか教えられなかった。第3部と第4部が除外されたのは、その植民地支配への風刺が問題視されたためである。

そして、最後の航海でガリヴァーがたどり着くのがHouyhnhnms「フーイヌム」である。フーイヌムという名は、馬の鳴き声から命名されたもの。この国では、言語と理性をも持つ馬の種族であるフーイヌムが、動物で野蛮な人間ヤフーを家畜にしている。そこでガリヴァーは、最初に出会った馬を主人として暮らす。

ガリヴァーは、虚偽や欺瞞のないフーイヌムの世界に永住を望むが、フーイヌムたちの反対にあって帰国する。そして帰国後は人間嫌悪症となり、人間

より馬の匂いを懐かしみ、馬小屋で生活するようになる。このように最後の第4巻においては、批判は人間そのものに向けられ、風刺はその頂点に達している。

24. ヤファーはどこからやって来たのか？

ここでは、ヤファーという生き物がどこからやってきたのか、ということについて考えてみる。ヤファーは以下のように描写されている。

はっと気づいて、この醜悪無比な動物が実に人間の姿そのものに他ならないことを知った時の、私の驚きと恐れとは到底筆舌につくしがたいものであった。いかにも、顔は平べったくてだだ広く、鼻はぺちゃんこで、唇は部厚く、口は大きかった。そこが私と違うといえば違っていた。しかし、こんなのは野蛮な種族にはごく当たり前のことで、赤ん坊を地面に這わせっぱなしにしたり、母親の背中でおんぶをして赤ん坊の顔をその肩にこすりつけさせたりするものだから、顔の恰好もそんな風に不細工になっただけの話だ。(スウィフト 320)

一読してわかるように、ガリヴァーの目に映るヤファーの姿は、ヨーロッパの植民者が被植民地のアフリカ系の住民に対して抱いていた印象を思い出させるものである。一方で、このヤファーの描写にはアイルランド人の姿も重ね合わされている。分厚い唇や低くつぶれた鼻といったものは、アイルランド人に見られない身体的特徴であるが、アフリカ系の特徴を表すこれらの特徴が「野蛮」全般を表す記号として定着し、イングランド人にとっての他者であるアイルランド人を表象するものへとすりかわっていた。実際、19世紀まで「低くつぶれた鼻」は、アイルランド人の特徴を表すステレオタイプとして、よく用いられていた。(向井秀忠「ヤファーの咆哮、フウイヌムのいななき」木下、清水 60-61) これらの他にも、中世以来の野人(ワイルドマン)をめぐる伝承がヤファーの表象の源となっているという指摘もある。

『穏やかな提案』というパンフレットにおいて、アイルランドの貧困に強い同情の気持ちを風刺という形で表していたスウィフトであるが、一方で『ガリヴァー旅行記』において、アイルランド人に対する差別的な意識がうかがえる点について、矛盾を感じる学生もいることであろう。ここではアイルランドにおけるスウィフトの位置について考える必要があ

る。

スウィフトは生粋のアイルランド人ではなく、イギリスから入植してきたアイルランド人、つまりアングロ・アイリッシュである。アングロ・アイリッシュの文学者の表現に、アイルランド人に共感しつつ、アイルランド人を自分と区別し、ともすれば蔑視しているともとれるものがみられることがある。W. B. イェイツの例がわかりやすいだろう。

イェイツは、アイルランド文芸復興やアイルランド独立に尽力する一方で、アイルランドに対する軽蔑、憎しみを露わにすることがあった。アイルランドにおいては、上層に位置するアングロ・アイリッシュと土着のアイルランド市民の間には、潜在的に不信と反目があり、それが時として顕在化することがあったが、それが影響を与えたことは間違いない。

1907年1月、イェイツの親友J. M. シングの*The Playboy of the Western World*『西の国の伊達男』の上演を巡る騒動は、その顕著な例であろう。芝居の内容がアイルランドの民衆を愚弄するものであると観客が騒ぎ、上演は中断。警官隊が出動するという出来事が起こった。この騒動を巡るイェイツの思いについては“*The Fisherman*”に記されている。

All day I'd looked in the face
What I had hoped 'twould be
To write for my own race
And the reality;
The living men that I hate.
The dead man that I loved.
The craven man in his seat,
The insolent unreprieved,
And no knave brought to book
Who has won a drunken cheer,
The witty man and his joke
Aimed at the commonest ear,
The clever man who cries
The catch-cries of the clown,
The beating down of the wise
And great Art beaten down. (9-24)

かつて私は一日中まともに向き合った、
我が種族のために書くとは
こうもあろうかと思ひ描いていたものと
現実との落差に。
私が憎む生きている者ら、
私が愛した死んだ男、
打ちひしがれて座席に沈む男、

傲慢な者らが咎められることもなく、
 卑劣なやつが報いを受けもせずに、
 酔い痴れた者らの歓声を浴びる。
 気の利く男の冗談は
 卑俗なやからの耳に向けられ、
 賢しらの男は道化師の
 決り文句を叫び立てる。
 賢者が打ち倒され、
 意外な〈芸術〉が打ち倒される。(高松雄一訳)

イエイツは、この出来事を通して、自らの抱く理想と現実との乖離に決定的に気づき、アイルランド市民から距離を置くこととなる。

ここでは、再度、作り手を取り囲む背景を理解しておくことの重要性を強調しておきたい。

25. フウイヌムは理想の共同体か？

ここでフウイヌムについて、武田将明「フウイヌムと差異のない世界」(木下卓, 清水明 188-200)を参考にしながら、詳しく見ていくことにする。

フウイヌムの1つの特徴は、固有名というものが存在していないという点である。国名自体も明確なものではなく、フウイヌム共同体という名称でしか表すことができない。山や川についてもその名前が示されることはない。固有名がないから、人間社会におけるような所有権をめぐる問題も起こることがなく、ガリヴァーにはこの共同体が理想の社会に見えるのも無理はないといえる。

一方で、ガリヴァーが懇意にしている栗毛馬を名前で呼ぶこともないし、ガリヴァー自身も栗毛馬から“yahoo”としか呼びかけられない。最後の別れの際にガリヴァーがかけられるのも“Take Care of thy self, gentle Yahoo”という言葉である。

固有名がないことからわかるが、フウイヌム共同体においては「個」というものの存在が希薄化している。フウイヌムたちの話し合いにおいて、意見が戦わされることはない。私的な意見というものが存在していないためである。もともと、「意見」という概念を表す言葉自体、この共同体には存在していない。フウイヌムたちは、理性の導きによって、必ず一つの結論が得られると信じている。全員の合意のものとの結論であるから、当然、全員がそれに従うことになる。もし従わなければ、理性を持たない生き物というレッテルを貼られてしまうことだろう。

このような特徴をもつこの共同体においては、当然のことながら、構成員間の差異は存在しない。にもかかわらず、フウイヌムたちは毛色によって、支

配する側と支配される側に明確に分かれており、その境界が侵されることはない。

主人の言葉を聞きながら思ったことは、同じフウイヌムでありながら、白毛や栗毛や鉄灰毛といった連中は、赤毛や連銭葦毛や黒毛などの連中とは、厳密にあって姿恰好が必ずしも同じではないということであった。また、同等の精神能力やその能力を増進させる力をもって生まれてきているわけではないということであった。したがって、召使なら召使のままいつまでもその地位に甘んじていて、自分の仲間から抜け出て偉くなろうという気には毛頭ならないようであった。事実、そんなことをしようものなら、この国では不埒至極で自然の理にも悖る奴だと思われるのがおちであった。

(スウィフト 361-2)

個の内面に差異を認めないからこそ、外見のみによって個体は区別される。だからこそ、支配者側のフウイヌムたちが結婚において重要視するのは、恋愛感情ではなく、血が混じり、毛色が変わってしまうのを避けることである。

一方ヤファーは、フウイヌムとはかなり異なった共同体を形成している。ヤファー社会の特徴の一つは、ヤファーたちが強い権力欲と殖財欲を持っているという点である。群れ同士、そして群れのなかでは個人同士が、より多くの富を手に入れるために常に争っている。フウイヌム共同体においては、個ではなく全体が重視されていたのに対して、ヤファーの集団においては、個しか存在しないといっても良い。

このようなヤファーのあり方には、当時のイギリス社会に対するスウィフトの皮肉が見てとれる。

清教徒革命と名誉革命は、政治および経済における構造改革をもたらし、王室、教会、地主階級を支配者とする伝統的な社会を大きく変えた。特に金融・経済の改革は、イギリスをヨーロッパで最も力を持つ国へと押し上げていった。国内では、金が都市部に集中するようになり、地方の地主階級の地位は急速に低下した。都市部で経済を実際に動かす者には非国教徒が多かったため、国教会の権威も失墜することとなった。資本が流動化することで、伝統的な権威は力を失い、財力・金が最も力を持つ時代が到来したといえる。

スウィフトは、こういった拝金主義が文明を破壊し、人間性を墮落させると批判した。そしてそれを具体化したのがヤファーの集団であった。

ヤフーは、フウイヌムが育てた作物を略奪するなどフウイヌム共同体にとっては邪魔な存在であり、皆殺しにすべきではないかということについて、フウイヌムたちは議論する。ジョージ・オーウェルは、ヤフーをナチス・ドイツ時代のユダヤ人と結びつけ、フウイヌム共同体を「全体主義組織の最高段階」と呼んでいるが(オーウェル「政治対文学—『ガリヴァー旅行記』論考」オーウェル 252-289)、ヤフーが近代社会の醜悪な面を皮肉るものとして描かれているのであれば、フウイヌム共同体が、ナチス・ドイツやロシアの共産主義と重なってくるのは、元々これらの政治運動が近代社会を浄化するという名目で発生したことを考えると、当然といえば当然のことであるといえるだろう。

ここで学生たちに問いかけたいのは、このフウイヌム共同体は理想の社会なのかどうか、スウィフトはこの共同体を理想として描いたのかどうか、ということである。人間に対する風刺を極限まで進めた結果、馬であるフウイヌムの共同体を理想として描くことになったのか、あるいは、フウイヌム共同体に見られる非人間的な全体主義的傾向を風刺することで、人間というものを肯定する立場へと大きく転回しているのか。批評家の間でも、解釈は分かれている。スウィフトの意図はどちらだったのか。

第4の旅に至るまでの、詳細にわたる、執拗ともいえる人間に対する風刺を念頭においたとき、スウィフトはフウイヌム共同体を理想として提示している、と考える方が妥当であるといえるだろう。この作品が、時としてシュールな結末を迎える20世紀の作品ではなく、小説勃興期である18世紀の作品であることも、判断の根拠となる。

しかし、このようにスウィフトの意図を推定したとしても、フウイヌム共同体に見られる全体主義的な傾向に対して、読者が感じる居心地の悪さが払拭されるわけではない。逆に、スウィフトの意図と結果としての作品のずれが際立ってくるといってもよい。

言葉をかえると、完成された作品は彼の意図を裏切り、未来のファシズム、共産主義を予言し、それに対して警鐘を鳴らすものとなっている。ひょっとするとスウィフトは無意識的に、彼の時代に個人主義へと振れていた振り子が、大きく逆の方向へと揺り返す危険性を嗅ぎとっていたのかもしれない。

『ロビンソン・クルーソー』のところで言及したが、優れた作家というものは、自分が所属している社会、歴史、文化といったものを鋭敏に、そして正確に理解しており、理解しているがゆえに、時とし

てその作品が予言的な力をもつ場合がある。時として作品は作者の意図を乗り越え、そこからはみ出していく。この点について、他の実例などもあげながら学生たちと理解したいところである。

26. 死なないと幸せ?

次に、スウィフトの人間に対する批判が、結末における反転を許さないほどに苛烈である実例として、ラグナグ王国における「ストラルドブルグ」についてみてみたい。

ストラルドブルグとは、ラグナグ王国において極まれに生まれる不死の存在であり、額にある赤い印によって見分けられる。ガリヴァーは、ストラルドブルグは昔の美德の生きた見本であり、すべての過去の時代の知恵を持ち、死の絶えざる恐怖が精神にもたらす暗澹たる重圧感を感じることなく、心を常に何の屈託もなく自由に遊ばせることのできる、そういう存在であると予想するが、実際は全く違っている。

不死ということから、私たちは老いることもないと想定しがちだが、ストラルドブルグは、不死ではあるが永遠に若いわけではない。ストラルドブルグに見られるのは、老人につきもののあらゆる愚かしさや脆さである。さらにストラルドブルグは、頑固で、気難しくて、貪欲で、不機嫌で、愚痴っぽくて、おしゃべりで、人間本来のあたたかい愛情がわからない。

さらにストラルドブルグは、非常に嫉妬深く、おまけに実行する力もないくせに欲望ばかりが強い。嫉妬の対象は、若者の不道德な行いと老人連中の死である。また、若い時とか壮年時代に見たり聞いたりしたこと以外には、何一つ覚えていない。

国家としても、ストラルドブルグ対策をとっており、ストラルドブルグが同じストラルドブルグと結婚した場合、夫婦のうちの若い方が80歳になると結婚は解消される。この世に永久に生き続けなければならないという呪われた運命に加え、妻という重い荷物をいつまでも背負わせて、ただでさえ重い不幸を倍加させるのは可哀想だとの判断からである。結婚に対するスウィフトの風刺がうかがえる箇所であるといえる。

ストラルドブルグは、80歳になると法的に死んだものとみなされ、生活費としてわずかな一部を残して、その他の財産はすべて跡取りが相続する。貧乏人は公費によって養われる。

90歳に達すると、歯も欠け、頭髪も抜け、そして味覚も失い、手に入るものなら何でも、ただ飲み、

食うだけという状態になる。病気にかかった場合、重くもならず軽くもならず、ずっと一定の症状が続く。記憶力も役に立たなくなり、物の名前、人の名前、親友や親戚の名前さえ、忘れてしまう。一つの文章でさえも初めから終わりまでまともに読み通せないため、読書の楽しみも味わえない。

言語というのは流動的なものなので、200年も経つと全く変わってしまうため、会話らしい会話を近所の人間と交わすこともできなくなり、自分の国に住んでいながらまるで異邦人同然となってしまう。

ラグナグ王国の人々は、絶えずストラルドブルグの姿を目の前に見せつけられているため、長寿を望む気持ちが余り強くなく、死を恐れる気持ちを失っている。そしてガリヴァーもまた、死は人間に与えられた救済ではないかと考えるようになる。

現代の高齢化社会を予言するかのようなこのエピソードにおいて、人間に対する風刺は極まっているといえるだろう。元々は特定の時代や特定の場所の特定の対象に向かっての風刺が、特定の時代や場所や対象を越えて、人間存在そのものへと向かうという点こそ、優れた風刺の特徴であることを学生たちと実感したい。

27. 「異化」ってなに？

ここで、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』をその主張の具体例としてとりあげることの多かった、ロシア・フォルマリズムについて考えてみる。

ロシア・フォルマリズムとは、1920年代、ソ連のモスクワ、ペテログラードを中心とした文学運動のことで、文学作品の内容とその社会的意義を重視していたそれまでの方向性を批判し、文学の形、文学がどう書かれているかを重視した。元々「フォルマリズム」という名称は、「形にばかり執着する連中」という軽蔑を込めて用いられたものであった。彼らの批評活動は、「ロシア・アヴァンギャルド」たちの実験的な作品と平行して展開していった。

その代表は、Boris Eichenbaum, Victor Shklovsky, Roman Jakobson, Rene Wellek らであるが、1930年代始め、社会主義リアリズムを主張するソ連政府による弾圧を受け、中心がチェコスロバキアへと移り、Prague Linguistic Circle のメンバーによって活動が続けられる。1940年代以降、ヤコブソンとウェレックはアメリカの大学教授として、非常に影響力のある仕事を続けていくことになる。

社会主義リアリズムとは、1934年の第1回ソヴィエト作家会議で採択され、それ以降、ソ連において芸術一般の創作の基本的方法とされるもので、写実

的な現実の描写のなかから革命への方向性を作り出し、共産党と国民を結びつけようとする考え方があった。たとえば、労働者の搾取とその死を描き、それを資本主義批判へと結びつける、といったことが創作のなかで行われた。こういった考え方に真っ向から異を唱えたのが、ロシア・フォルマリズムであった。

ロシア・フォルマリズムは、日常の言語と文学の言語は根本的に異なっていると考える。日常の言語は、言語の外にある外界の事物を指示することで、あるメッセージ・情報を伝える。一方、文学の言語は、外界の事物を指示するのではなく、言語自体の特徴、たとえば各記号・要素の相互関係に読者の関心を引きつける。ヤコブソンは「最新ロシア詩」(1921)において、文学研究の対象は文学それ自体ではなく、文学性、つまり「ある作品を文学作品にしているもの」であり、その文学性を生み出すものが“foregrounding”「前景化」と“defamiliarization”「異化」であるとする。前景化とは、あるものを際立たせることであり、異化とは、あるものを普段とは違って見えるようにすることであるが、いずれも文学の形式と関わるものであることがわかる。

今も述べたように、異化とは、普段、見慣れて親しんでいる事物・観念を普段とは違って見えるようにすることであり、新しい知覚への方向づけをすることを目的としている。ガリヴァー旅行記は、この異化の具体例について枚挙にいとまがない。たとえば、小人国リリパットにおいて、ガリヴァーが2人の係官に身体検査を受けるエピソードがある。係官が書いた報告書に次のような記述がある。

この他にもポケットが二つあったが、われわれはその中へ入ることはできなかった。彼は小ポケットと称していたが、要するに腰着の上部の一部を縦に切り裂いた大きな二つの割れ目のようなものであったが、本人の腹部の圧力のためにぴったりと閉ざされていた。右側の小ポケットからは、その底にある何か驚くべき道具に結びつけられているらしい、大きな銀の鎖が垂れさがっていた。その鎖の末端にあるものを、とにかく、引っぱり出すようにわれわれは彼に命じた。引っぱり出されたものを見ると、半分は銀、半分は或る種の透明な金属、でできている円形のものであった。透き通っている側には何か奇妙な文様がぐるりと描かれており、早速その文様に手で触ってみようとしたが、われわれの指は上に述べた透明な物質に遮られてしまっ

た。彼はこの道具をわれわれの耳もとに当てがってくれたが、そこから絶え間なく響いてくる音は、あたかも水車の音さながらであった。われわれの推測によれば、音を発するものは何かわれわれの知らない動物か、さもなければ、彼が拝んでいる神か、そのいずれかであろうと思われた。どちらかと強いていえば、後者であろうと考えたい。なぜなら、彼がわれわれに向かって、何をやるにしても自分は必ずこれと相談することにしている、と明言したからである(といっても、彼の言い方が甚だ不完全だったので、当方として正確に彼の真意を把握したかどうか定かではない)。これは自分の神託であり、わが人生におけるあらゆる行動の時を指示するものである、というのが彼の言い分であった。

(スウィフト 34-35)

ここではまず、これがなにを記述したものであるか、学生たちに考えさせることから始めたい。「鎖」「半分は銀」「半分はある種の透明な金属」「円形」といったところから、これが懐中時計の描写であることに気づく学生も多いことだろう。ここでは時計というものが、時計を初めて見る目によって異化されている。係官は、ガリヴァーが「何をやるにしても必ずこれと相談する、これは自分の神託であり、我が人生におけるあらゆる行動の時を指示するものである」と語ったことを根拠に、これは「彼が拝んでいる神」であると結論づける。このエピソードから気づかされるのは、私たちがどれだけ時間というものに縛られているか、ということである。

異化という技法によって、普段当たり前だと思っているものが普段と違って見えてくる。スウィフトが、そこに皮肉、風刺といったものを忍ばせていることもわかるだろう。それこそが、異化というものの一つの重要な特徴を構成している。

もう1つの例を見てみよう。次にあげるのは、巨人の国ブロブディンナグにおける女官の描写である。

乳母がいつも連れていってくれた王妃付きの女官たちのことだが、彼女たちの間に入っている何が困るといっても、まるでこちらが何の値打ちもない虫けらのように、礼儀もへったくれもない、まさしく傍若無人といってもよいような態度で私を遇するのには、全く困り果ててしまった。つまり、私の目の前で、肌もあらわに素っ裸になって下着を着かえたりするのだ。そ

の間、私は化粧台の上にちょこんと置かれていて、彼女たちの裸体が否応なしに私の目にまともに飛び込んでくるというわけだ。その姿たるやおよそ心を蕩かすようなものではなく、ただもう恐怖と嫌悪の情がこみ上げてくるのみであった。よくよく近くから見てみると、皮膚はすべすべしているどころか、粗くてでこぼこしていて、色にしても一様ではなく、あちらこちらにはお盆くらいの大きさの黒子があるし、そこに生えている毛がまた細引きよりもっと頑丈なしろものときていた。そんなわけで、体の他の部分にいたってはまた何をか言わんや、というわけだ。それだけでなく、私が傍にいるのに、飲んだものをいとも平然として排泄するのだ。それも、3トン以上はたっぷり入ろうとする大きな容器に、少なくとも1回に2樽分くらいの分量を垂れ流すのである。これらの女官たちのうちで一番の美人は、十六歳になる快活で茶目っ気たっぷりの娘であったが、この子がまたどうかすると私を自分の乳首に跨らせるという悪戯ぶりを発揮するのであった。いや、この子はその他にもいろんな悪戯をやった。しかし、余り詳しく述べるのもどうかと思われるので、そのあたりのことは読者のお許しを得て省略させていただくことにしたい。

(スウィフト 159-161)

小人の国の場合とは立場が逆転し、ガリヴァーは、いわば小人の目で女性を観察することになる。先の例と同様、そこには辛辣な皮肉がこめられている。

『ガリヴァー旅行記』における、物理的に体が伸び縮みすることによる世界の異化については、ルイス・キャロルが『不思議の国のアリス』において意識していたことは間違いない。第5章「青虫が教えてくれたこと」においてそれは顕著に認められる。

しばらくのあいだ、青虫とアリスはだまって見つめ合っていました。とうとう青虫は水ギセルを口からはなして、ものうげで眠そうな声で話しかけました。

「あんた、だれ？」と青虫。これでは会話がはずむはずがありません。アリスは、かなりもじもじしながら答えました。「あの、わたし、よくわからないんですけど、今のところは一少なくとも今朝起きたときは自分がだれだかわかっていたんですが、それから何度も変わってしまったみたいで……」

「どういうことかな？ 自分の言っていることを説明したまえ。」青虫は厳しい口調で言いました。

「その自分がわからないんです」とアリス。「わたし、自分じゃなくなっているんです。」

「わからんな」と青虫。

「これ以上ははっきりとは申し上げられません。」アリスはとても礼儀正しく答えました。

「そもそも、わたしにもわからないんです。一日のうちいろんな大きさに変わってしまうと、わけがわからなくなるんです。」

「そんなことはない」と青虫。

「それは、まだ、あなたはそうお感じになっていないだけだと思います。」アリスは言いました。「でもいつか、さなぎにおなりになっていつかは、さなぎにおなりでしょうから—そしてちょうちょになったら、少し変な感じがすると思われませんか。」

「ちっとも。」青虫は言いました。

「えっと、ひょっとすると、あなたは違ったふうにお感じなのかもしれませんけれど」とアリス。「わたしには、とっても変なことなんです。」

「あんたには、だって！」青虫はばかにしたように言いました。「あんたは、だれ？」

(キャロル 61-62)

体の大きさが変わることで考えることができなくなるとアリスが考えるのは、自分のアイデンティティが揺らいでいると感じるからに他ならない。アリスは、自分自身は変わらないものであるという前提をもっていることがわかる。一方、毛虫は自分自身が変わっていくことを前提としており、アリスの言っていることが理解できない。

自分自身のアイデンティティとは何かという、若い時に必ず向かい合うことになる問題を考えるうえで、興味深い例であろう。学生たちにもじっくりと考えさせてみたい。

さらに、夏目漱石『我輩は猫である』、多和田葉子『雪の練習生』など、動物の視点が入り入れられている作品も紹介し、『ガリヴァー旅行記』と方法としての異化というものの影響の大きさを学生たちに実感させたい。

最後に、ロシア・フォルマリズムの理論の根底にあるものを知るべく、シクロフスキーの論文「手法としての芸術」(桑野, 大石 25)の一節を読んでみる。

生の感覚を取り戻し、事物を感じ取るためにこそ、石を石らしくせんがためにこそ、芸術と呼ばれるものが存在しているのである。芸術の目的は、再認=それと認めることのレベルではなく、直視=見ることのレベルで事物を感じ取らせることにある。そして芸術の手法とは、事物を〈異化〉する手法であり、形式を難解にして知覚をより困難にし、より長引かせる手法なのである。というのも、芸術にあっては知覚のプロセスそのものが目的であり、そこでこのプロセスを長引かせねばならないからである。芸術は事物の成り立ちを体験する方法であり、すでにできあがってしまったものは芸術においては重要ではないのである。

「生きているという感覚を取り戻すため、石を石らしくするために、芸術は存在している」「芸術の目的は、知らせることではなく、感じさせることにある」「芸術においては、知覚のプロセスそのものが目的なのだから、形式を難解にし、知覚を遅らせる必要がある」といったあたりは、ロシア・フォルマリズムという枠組みを越えて、文学・芸術全般の本質を表している部分だといえるだろう。大江健三郎が、『新しい文学のために』(1988)において、自らの創作の方法論として、ロシア・フォルマリズム、特に異化というものがあることに言及していることにもふれる。

最後に、次の一節から、この文学・芸術の方法論の根底に何があるのかということについて学生たちと考えてみたい。

私は部屋の掃き掃除をしたのだが、ひとわり回って長椅子のところへきたとき、自分がこの長椅子を拭いたのかどうか思い出せなかった。こうした動作はあまりにも習慣的、無意識的なものとなっていたために思い出すことができなかったのであり、もはや思い出すことなど不可能だと感じた。そういうわけで、自分で拭いておきながらそれを忘れてしまったなら、つまり無意識に行動したのであれば、これは何もしなかったのと同じことになる。もし誰かが意識して見ていたとすれば、想起こすこともできただろう。もしだれも見ているものが無く、あるいは見えても無意識的であれば、もし多くの人々の生活全体が、無意識的に過ごされていくのなら、その様な生活は存在しないも同然なのだ(1915年2月29日付、ニコリスコエ村

にてのレフ・トルストイの日記より。『年代記』誌、1915年12月号、354頁)。この様にして、生活は無に帰しつつ、消えていくのである。自動化の作用が事物を、衣服を、家具を、妻を、そして戦争の恐怖心を呑み込んでいってしまうのだ。「もし多くの人々の生活が無意識的に過ごされていくのならば、その様な生活は存在しないも同然なのだ。(シクロフスキー「手法としての芸術」桑野、大石 25)

ロシア・フォルマリズムの根底にあったのは、スターリニズムへの強烈な批判であったことがわかる。

一見、文学や芸術は政治や社会状況とは無関係に感じられるかもしれないが、非常に重要な結びつきがあることをこの具体例から理解させたい。

参考文献

- 阿部公彦『英語文章読本』(研究社、2010)。
 阿部公彦『英語的思考を読む』(研究社、2014)。
 阿部公彦『詩的思考のめざめ：心と言葉にほんとうは起きていること』(東京大学出版会、2014)。
 イェイツ、W.B.『対訳 イェイツ詩集』高松雄一訳(岩波、2009)。
 ウィース、ヨハン・ダビッド『スイスのロビンソン(上・下)』宇多五郎訳(岩波、1950)。
 ウイドウソン、H.G.『文体論から文学へ：英語教育の方法』田中英史、田口孝夫訳(彩流社、1989)。
 ウイドウソン、H.G.『文学と教育：詩を体験する』梅沢時子、野呂浩、小田朗美訳(英宝社、2005)。
 オーウェル、ジョージ『鯨の腹のなかで』川端康雄訳(平凡社、2009)。
 大江健三郎『新しい文学のために』(岩波、1988)。
 岡田伸夫、南出康世、梅咲敦子編『英語研究と英語教育：ことばの研究を教育に活かす』(大修館書店、2010)。
 川口喬一『イギリス小説入門』(研究社、1989)。
 木下卓、清水明編著『ガリヴァー旅行記』(ミネルヴァ書房、2006)。
 キャロル、ルイス『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳(角川、2010)。
 クック、ガイ『英語教育と「訳」の効用』北和丈訳(研究社、2012)。
 クツェー、J.M.『マイケル・K』くぼたのぞみ訳(筑摩書房、2006)。
 クツェー、J.M.『敵あるいはフォー』本橋哲也訳(白水社、1992)。
 桑野隆、大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド6 フォルマリズム』(国書刊行会、1988)。
 ゴールディング、ウィリアム『蠅の王』平井正穂訳(新潮社、1975)。
 斎藤兆史編『言語と文学』(朝倉書店、2009)。
 塩谷清人『ダニエル・デフォーの世界』(世界思想社、2011)。
 スウィフト、ジョナサン『ガリヴァー旅行記』平井正穂訳(岩波、1980)。
 大学英語教育学会文学研究会編『英語教育のための文学案内事典』(彩流社、2000)。
 高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』(ひつじ書房、2015)。
 田中宏幸、坂口京子編『文学の授業づくりハンドブック：授業実践史をふまえて』(溪水社、2010)。
 多和田葉子『雪の練習生』(新潮社、2013)。
 夏目漱石『吾輩は猫である』(筑摩書房、1987)。
 浜井祐三子『イギリスにおけるマイノリティの表象：「人種」・多文化主義とメディア』(三元社、2004)。
 廣野由美子『一人称小説とは何か：異界の「私」の物語』(ミネルヴァ書房、2011)。
 柴田元幸『柴田元幸翻訳叢書 プリティッシュ&アイリッシュ・マスターピース』(スイッチ・パブリッシング、2015)。
 藤田佳也『50の質問で読み解く18世紀イギリス小説(1)』『酪農学園大学紀要』第42巻 第2号 41-52頁。
 マーテル、ヤン『パイの物語』唐沢則幸訳(竹書房、2004)。
 マッカーシー、マイケル『語学教師のための談話分析』安藤貞雄、加藤克美訳(大修館書店、1995)。
 真野泰『英語のしくみと訳しかた』(研究社、2010)。
 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』(白水社、2003)。
 三森ゆりか『外国語で発想するための日本語レッスン』(白水社、2006)。
 村上春樹、柴田元幸『翻訳夜話』(文藝春秋、2000)。
 吉村俊子他編『文学教材実践ハンドブック：英語教育を活性化する』(英宝社、2013)。
 Biggs, John and Catherine Tang, *Teaching for Quality Learning at University: What the Student Does* (New York: Open University Press, 2011)。
 Booth, Wayne C., *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: Chicago University Press, 1983)。
 Carter, Ronald and John McRae, *Language,*

- Literature and the Learner : Creative Classroom Practice* (New York: Pearson Education, 1996).
- Collie, Joanne and Stephen Slater, *Literature in the Language Classroom : a Resource Book of Ideas and Activities* (New York: Cambridge University Press, 1987).
- Engetsu Yuko, ed, *Books on Children in 16th-18th Century Britain Series I: 1701-1750* (Kyoto: Eureka Press, 2007).
- Hall, Geoff, *Literature in Language Education* (New York: Macmillan 2015).
- Richetti, John, *The English Novel in History, 1700-1780* (New York: Routledge, 1999).
- Simpson, Paul, *Language through Literature: an Introduction* (New York: Routledge, 1997).

Stanzel, F. K, *A Theory of Narrative* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986).

summary

A literary text is very effective in helping the students to have the experience of awaring and the practice of considering. What is the most important is where and how we should ask them questions in the class. Adequate questions at adequate times will motivate the students to consider about the text, and moreover, about the world and themselves. This paper proposes 50 effective questions in the class of 18th century English novels. In this part, 11 questions will be discussed about Jonathan Swift's *Gulliver's Travels*.